

氏名	尾野 明未 (オノ アケミ)		
本籍	神奈川県		
学位の種類	博士 (学術)		
学位の番号	博士 第 066 号		
学位授与の日付	2014 年 3 月 27 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
学位論文題目	母親の子育てレジリエンスに関する研究 ―子育てレジリエンス尺度の作成及び子育て支援プログラムの適用を通して―		
論文審査委員	(主査) 桜美林大学教授	石川利江	
	(副査) 桜美林大学教授	森和代	
	桜美林大学特任教授	茂木俊彦	
	常磐大学准教授	秋山邦久	

論文審査報告書

論文目次

序章

第 1 節 問題の提起 1

- 第 1 項 育児を取り巻く問題 1
- 第 2 項 母親の子育てストレスに関する研究動向 5
- 第 3 項 レジリエンス研究 13
- 第 4 項 子育て支援施策の現状 18
- 第 5 項 本研究の目的と構成 21

第 2 章 母親の子育てにおけるストレスとソーシャルサポートに関する研究【研究 1】

第1節	母親の子育てストレスとソーシャルサポートに関する調査研究	23
第1項	問題と目的	33
第2項	方法	34
第3項	結果	36
第4項	考察	44
第2節	子育てにおける心理学的ストレスモデルとソーシャルサポートの関連性につ いての検討	23
第1項	目的	23
第2項	方法	23
第3項	結果	26
第4項	考察	31
第3節	本章の全体的考察	47
第3章	子育てレジリエンス尺度の作成【研究2】	50
第1節	子育てレジリエンス尺度の作成	50
第1項	問題と目的	50
第2項	方法	50
第3項	結果	53
第4項	考察	55
第2節	子育てレジリエンス尺度の妥当性の検証	57
第1項	目的	57
第2項	方法	58
第3項	結果	59
第4項	考察	61
第3節	子育てレジリエンス尺度短縮版の作成と妥当性の検証	62
第1項	目的	62
第2項	方法	62
第3項	結果	63
第4項	考察	64
第4章	子育てレジリエンスの関連要因の検討【研究3】	65
第1節	子育てレジリエンスに影響を及ぼす関連要因の検討	65
第1項	問題と目的	65
第2項	方法	65
第3項	結果	66
第4項	考察	70
第2節	障害児を持つ母親の子育てレジリエンスに影響を及ぼす関連要因の検討	72
第1項	問題と目的	72
第2項	方法	72
第3項	結果	74

第4項	考察	80	
第3節	子育てレジリエンス構成要因のモデルの検討	83	
第1項	問題と目的	83	
第2項	方法	83	
第3項	結果	85	
第4項	考察	91	
第5章	子育てレジリエンスの構成要因の妥当性の実証的検証【研究4】	94	
第1節	子育てレジリエンス促進プログラムによる心理的変化の構造図からの検討	94	
第1項	目的	94	
第2項	方法	95	
第3項	結果	98	
第4項	考察	104	
第2節	子育てレジリエンス促進の介入プログラムの効果の検討	106	
第1項	目的	106	
第2項	方法	106	
第3項	結果	108	
第4項	考察	112	
第3節	プログラム評定と自由記述の評価による子育てレジリエンスの構成要因の検証	113	
第1項	目的	113	
第2項	方法	113	
第3項	結果	114	
第4項	考察	118	
第4節	本章の全体的考察	119	
第6章	母親の子育てレジリエンスと心理学的ストレスモデルとの関連性の研究【研究5】	122	
第1節	子育てレジリエンスと心理学的ストレスモデルとの関連性の検討	122	
第1項	問題と目的	122	
第2項	方法	124	
第3項	結果	128	
第4項	考察	137	
終章		139	
第1節	要約	139	
第2節	総合考察	143	
第3節	今後の研究課題と展望/	156	
参考文献		157	

論文要旨

近年、地域のつながりの希薄や核家族化の進展などにより、子育て中の親の孤立感、不安感、負担感が大きくなっているとされる。本論文は、子育て中の母親のストレスと、ストレスを乗り越え適応していくプロセスをレジリエンスという概念を用いて検討したものである。子育てストレスに関する研究は非常に多く報告されているが、レジリエンスという観点からの研究は、本邦ではほとんど行われておらず、本論文は極めて先駆的研究といえる。特に、子どもに障害のある母親に対してのレジリエンスという概念を用いた詳細な検討は、ストレスというネガティブな側面のみが強調されがちな課題について新たな視点からの検討であり、大きな意義をもつ研究と言える。

本論文は、母親の子育てストレスや子育て支援に関する現状と文献的レビュー、レジリエンスに関する研究動向をまとめた問題提起の第1章、実際の調査・介入結果に基づく5つの研究の章、そして終章で構成されている。

第2章の研究1では、母親の子育てにおけるストレスとソーシャルサポートの関連性について、サポート源からの検討を行った。健常児、障害児を育てる母親それぞれにとってストレス低減に有効なコーピングと効果的なサポートとは、どのようなものなのかを明らかにしている。

第3章の研究2では、他の領域で使用されてきたレジリエンスの概念を用いて、12項目3下位尺度得点を有する新たな子育てレジリエンス尺度を開発した。信頼性・妥当性に問題なく利用可能性が大きいことが示された。

第4章の研究3では、新たに作成された子育てレジリエンスの心理的特徴とストレス低減機能について明らかにすることを目的とし、分散分析、パス解析を用いた検討を行っている。母親や子どもの年齢、障害の有無などが関連しあって子育てレジリエンスに影響すること、子育てレジリエンスが育児ストレス認知を介してストレス反応に影響することを示した。

第5章研究4では、子育てレジリエンスの構成要因の妥当性検証を行うとともに、子育てレジリエンス促進のための介入プログラムを実施した。1回90分のセッションを6回実施し、そこで話された内容についてM-GTA法による分析を行い、妥当性の検証を試みている。同時に量的評価尺度を用いたプログラムの効果評価も行い、一定の効果があるとしている。

第6章研究5では、障害児を持つ母親の子育てレジリエンスと心理ストレスモデルとを統合したモデルの構築を試みている。共分散構造分析という高度の分析手法を用いて、子育てレジリエンス、育児ストレス、ストレスコーピング、精神的健康という複雑な関係性を明らかにし、障害児を育てる母親の状況を説明している。

終章では、本論文全体を要約したうえで総合考察を行った。これらの研究を通し、子育てに柔軟に適応していくレジリエンスが、子育て中の母親にとって重要であり、これまで言われてきた育児中の母親への支援だけでは十分ではなく、母親がサポートを構築してい

く力を持てるようなサポートこそが必要であることを提唱している。

論文審査要旨

本論文は、子育てストレスにレジリエンスという概念を導入した先駆的研究といえる。障害児と健常児の母親の子育てにおけるストレスの現状をストレスコーピング、ソーシャルサポートといった心理的ストレスモデルからの検討を行い、さらにレジリエンス概念を含めて母親の精神的健康の促進にどのような要因が効果をもつのかについて詳細な分析を行い、そのメカニズムを明らかにしたものである。

子育てレジリエンスを評価するための妥当性・信頼性を有する尺度の開発は、客観的研究の基礎となるものであり、子育てを通じた母親の適応過程の評価や育児支援の効果を評価する際の活用が期待できる。子育てレジリエンスの構成要因の関連性の分析から、ソーシャルサポートの環境資源の強化が、内的な資源としての子育てに関するスキルや子どもとの関係の母親の受容的認知を向上させることを明らかにしていることも、極めて興味深いと評価された。

本論文の内容は、今後、健康心理学の発展に大いに寄与するものと判断でき、学位請求の基準を満足している。博士論文として合格と判断された。

口頭審査要旨

子育てストレスにレジリエンス研究を統合した精力的な研究であるという点で審査者の意見が一致した。そのうえでいくつかの確認と質疑が行われた。子育てレジリエンスという概念自体をどのように考えるか、子育てにおける夫のサポートの問題、インフォーマルなサポートとフォーマルなサポートの活用の問題などについての質問がなされた。これに対し学位論文申請者は、子育てレジリエンスとはサポートの構築という視点を含めたものであり学習により獲得できるものとしてとらえていること、従来の多くの研究のように夫をサポート源としてだけみるのではなく共同体という視点を加えて検討すべきものであること、インフォーマルなサポートの検討に偏った従来の研究に対し本論文ではフォーマルなサポートのあり方についても研究の中に位置づけたことなどを丁寧に回答した。このような質疑応答の態度、研究の遂行、論文作成のプロセスなどからも今後自律した研究者として活躍することが期待できると判断された。子育てストレスというネガティブな側面だけでなく、レジリエンスというポジティブな観点を加えた研究は独創的なものであり、特に障害児を育てる母親についての検討は今後の支援のあり方を考える上で大いに貢献する研究であると評価された。以上のような点を総合して検討し、学位の授与に値すると判断された。